

児玉町遺跡調査会報告書 第10集

しお や しも おお つか い せき  
塩谷下大塚遺跡

— D地点の調査 —

2000

埼玉県児玉町遺跡調査会



## 序

このたび、刊行される運びとなりました本報告書は、平成2年に刊行いたしました「塩谷下大塚遺跡B地点」の東側に隣接する場所の報告書であります。

本地付近は、「下大塚」という小字名にもあるように古墳時代の大きな塚があったことが、調査により明らかになりました。

古墳時代には、人々がこのような大きな塚を造る技術と財力を急速に持っていくようです。しかも、大きな築造物は人間の技術力の吸収と蓄積への結果であります。その一部が平成の世に発掘されたことは、その技術力の継続性を感じずにいられません。また、この技術を基礎としなければ、現在の繁栄はなかったことでしょう。

そして、この報告書が児玉地方の技術の歴史の継続を次世代につなげていくことの手段の一端となれば、喜ばしいことであります。

本書が刊行されることにより、今後、歴史を解明するための一資料として御活用いただければ幸甚でございます。

最後になりましたが、本報告書が刊行できたことは、ひとえに埋蔵文化財保護にご協力を頂いた日新建設工業株式会社をはじめ埼玉県教育局文化財保護課ならびに町民皆様の暖かいご理解とご協力の賜物であると深く感謝致しております。

平成12年6月1日

児玉町遺跡調査会  
会長 富丘文雄





## 例 言

- 1 本書は、埼玉県児玉郡児玉町大字塩谷字下大塚751-9・15番地に所在する塩谷下大塚遺跡D地点の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、2階建て共同住宅建設に先立つ埋蔵文化財保存事業として、平成3年5月13日から同年同月31日までの期間に実施した。
- 3 発掘調査および整理・報告に要した経費は、日新建設工業株式会社の委託金である。
- 4 調査地点付近は、過去に3次の発掘調査が行われており、昭和47年に埼玉県遺跡調査会が埼玉北部用水児玉幹線水路建設に伴って「塩谷地区遺跡」として調査した地点をA地点、昭和59年に児玉町教育委員会が個人住宅建設に伴って調査した地点をB地点、昭和63年に同教育委員会が農道改良舗装工事に伴って調査した地点をC地点とし、今回の調査地点をD地点とする。
- 5 本書の編集は、整理参加者の協力を得て、徳山寿樹が行った。原稿の執筆は、第II章を松澤浩一、第V章を恋河内昭彦、第VI章を鈴木徳雄、その他を徳山寿樹が行った。
- 6 発掘調査及び本書作成にあたって下記の方々や機関から御指導・御教示・御協力を賜った。(順不同敬称略)  
赤熊浩一 池田敏宏 岩本克昌 梅沢太久夫 江原 英 大倉 潤 太田博之  
大屋道則 岡本幸夫 金子彰男 駒宮史朗 小宮山克巳 坂本和俊 笹森健一  
篠崎 潔 外尾常人 高橋一夫 田村 誠 千装 智 利根川章彦 鳥羽政之  
中沢良一 長滝歳康 中村倉司 長谷川勇 坂野和信 平田重之 増田 逸朗  
増田一裕 丸山 修 丸山陽一 水村孝行 宮本直樹 矢内 勲 山川 守男  
山口逸弘 弓 明義 埼玉県生涯学習部文化財保護課 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 児玉郡市文化財担当者会 東海大学考古学研究会
- 7 本書作成の主な作業分担は、次の通りである。  
土器接合・復元(野沢公代 新井千都子)  
土器観察・実測(恋河内昭彦)  
土器拓本(恋河内昭彦)  
遺構原図操作(新井嘉人)  
トレース(倉林八重子 中原好子)  
遺構・遺物写真(徳山寿樹)  
編集庶務(大熊季広 尾内俊彦 田口照代 櫻井和哉)

## 児玉町遺跡調査会の組織

### 平成3年度（発掘調査）

会 長	富丘 文雄	児玉町教育委員会教育長
理 事	清水 守雄	児玉町教育委員会委員長
	田島 三郎	文化財保護審議委員長
	中兼 久偉	文化財保護審議委員
	武内 和雄	文化財保護審議委員
	永尾 憲司	総務課長
	高橋 寛	産業課長
	山口 雄朗	土地改良課長
	木村 和雄	土木課長
	杉村 義昭	都市計画課長
	吉川 豊	社会教育課長
監 事	日向 國俊	文化財保護審議委員
	安久沢 一	企画財政課長
幹 事	前川 由雄	社会教育課長補佐
	岩上 高男	社会教育課長補佐
会計幹事	金子 幸弘	社会教育課主任
幹 事	恋河内昭彦	社会教育課主事
	渋谷 路子	社会教育課主事
担 当 者	鈴木 徳雄	社会教育課主任
	徳山 寿樹	社会教育課主事
調 査 員	尾内 俊彦	児玉町遺跡調査会調査員

### 平成11年度（整理・報告）

会 長	富丘 文雄	児玉町教育委員会教育長
理 事	田島 三郎	文化財保護審議委員長
	清水 守雄	文化財保護審議委員
	小島 和子	文化財保護審議委員
	吉川 音繪	文化財保護審議委員
	長谷川典明	文化財保護審議委員
	大塚 勲	総務課長
	中林 重	総合政策課長
	井上 隆雄	農林商工課長
	出牛 博	土木課長
	立花 勲	都市計画課長
	前川 由雄	社会教育課長
幹 事	三上 元一	社会教育課長補佐兼係長
	萩原千恵子	社会教育係主任
	鈴木 徳雄	文化財係長
	恋河内昭彦	文化財係主任
	徳山 寿樹	文化財係主事
	大熊 季広	文化財係主事
	松澤 浩一	文化財係主事補
調 査 員	尾内 俊彦	児玉町遺跡調査会調査員

# 目 次

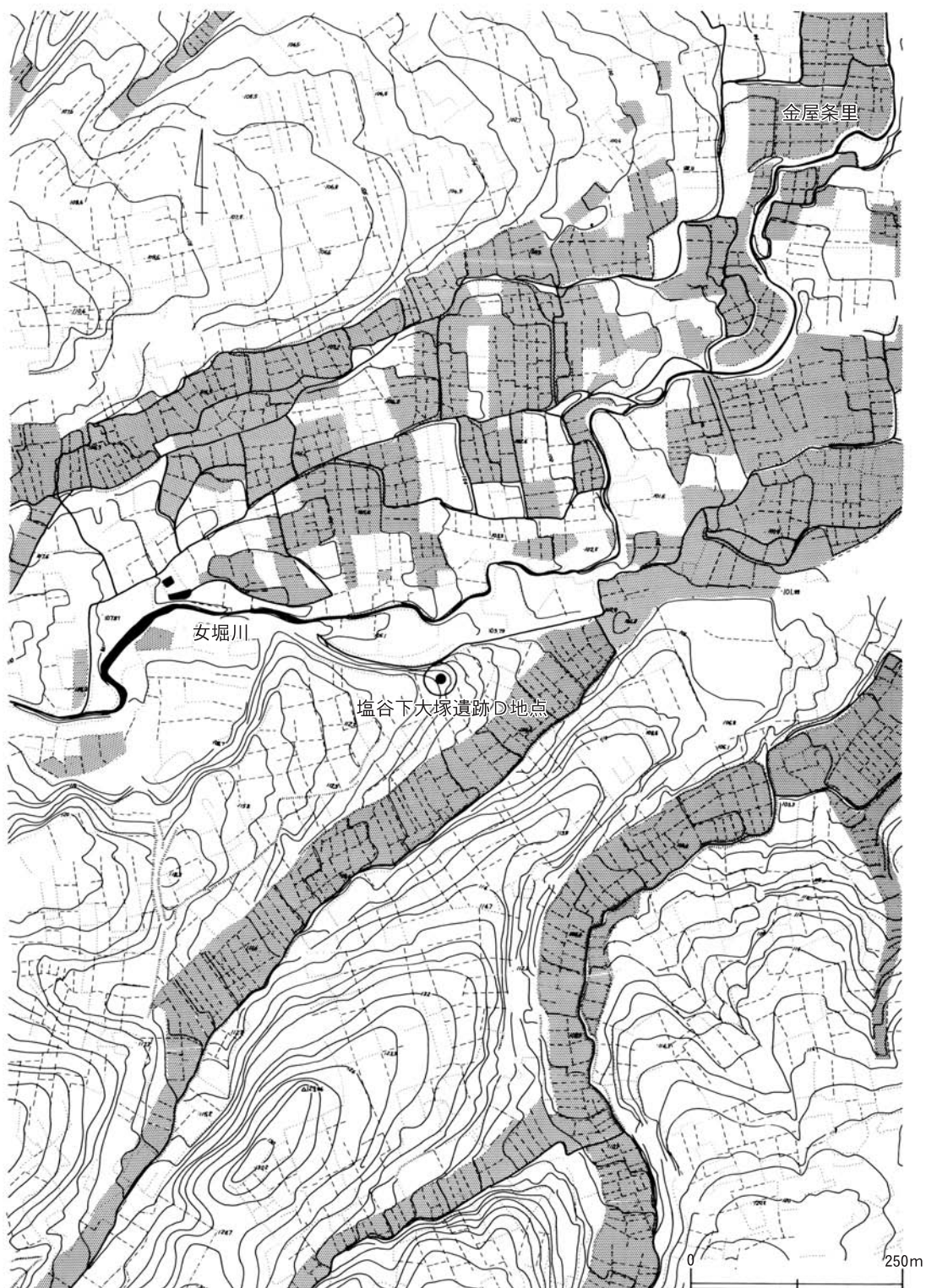
序

例言・凡例

第 I 章	発掘調査の経緯 .....	1
第 II 章	地理的・歴史的環境 .....	2
第 III 章	塩谷下大塚遺跡 D 地点の調査 .....	5
第 IV 章	遺構の概要 .....	6
	1. 方形周溝墓	
	2. その他の遺構	
第 V 章	第 2 A 号方形周溝墓の出土遺物 .....	9
	1. パレス文様壺	
	2. その他の遺物	
第 VI 章	児玉丘陵における集落域と墓域 .....	13
	1. 方形周溝墓と集落域	
	2. 古墳前期集落の継承性	
	3. 遺跡の表示性と土地利用の継承性	

参 考 文 献

写 真 図 版



第1図 塩谷下大塚遺跡D地点調査位置図



## 第 I 章 発掘調査の経緯

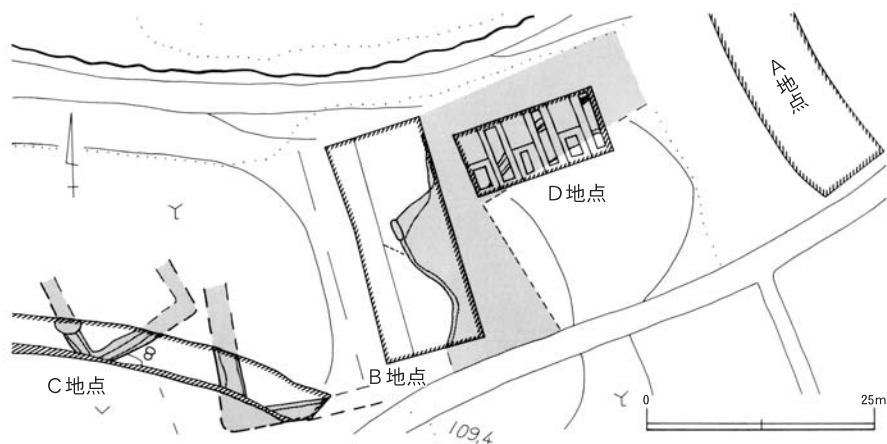
児玉町大字塩谷字下大塚に位置する本報告にかかる遺跡の発掘調査は、二階建共同住宅の建設に伴って実施されたものである。調査にかかる区域は、周知の埋蔵文化財包蔵地である塩谷下大塚遺跡(No.54-093)に相当し、当該区域に接する隣地は、昭和59年度に児玉町教育委員会によって発掘調査が実施されており、その結果、遺構の一部が当該区域にも延びていることが確認されていた。

### 調整の経緯

発掘調査に至る経緯は、平成3年に日新建設工業株式会社が、当該区域に共同住宅の建設を計画し、同年2月以来、埋蔵文化財の保存の措置について調整を進めていたところ、平成3年4月27日午後より現地において工事が実施されたため、4月30日に埋蔵文化財の重要性と「埋蔵文化財発掘の届出」の義務について説明を行った。しかし、基礎工事が続行されていたため、埼玉県教育局指導部文化財保護課とその対応について協議したところ埋蔵文化財係主査が来町し、現地を視察の上、町社会教育課担当職員とともに開発主体者に対して埋蔵文化財保護の重要性についての説明を行った。こうした対応の結果、開発主体者が埋蔵文化財保護の必要性について認識するところとなり、急遽発掘調査を実施し記録保存の措置をとることとなったものである。

### 発掘の届出

平成3年4月10日付けで開発主体者より「埋蔵文化財発掘の届出」が、更に同日付で調査主体者である児玉町遺跡調査会会長より「埋蔵文化財発掘調査の届出」が、児玉町教育委員会と埼玉県教育委員会を経て文化庁長官に提出された。なお、埼玉県教育委員会からは、開発主体者に対して同年5月21日付け教文第3-46号による「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について」の通知があり、文化庁からは児玉町遺跡調査会に対して、同年7月4日付け委保第5の965号による「埋蔵文化財の発掘について」の通知があった。(児玉町教育委員会社会教育課)



第2図 遺跡地点別位置図

## 第II章 地理的・歴史的環境

### 1. 地理的環境

本遺跡が所在する児玉町は、埼玉県北西部に位置し、南西から北東方向に展開する細長く変化に富んだ地形を呈している。児玉町の地形は、町を東西に横断する「八王子―高崎構造線」を境に南側の三波川変成帯の結晶片岩を基盤とする上武山地から北東方向に半島状に張り出した児玉丘陵などの丘陵地帯や本庄台地など台地を含む微高地や低地により構成されている。さらに、平野部には生野山、大久保丘陵などが残丘状に点在する。丘陵下の北側には、町を南西から北東に小山川、その北側を女堀川、群馬県との県境をなす神流川が流れている。神流川によって開析・形成された神流川扇状地の本庄台地がある。台地の南東側に沿って山地内より流れる女堀川等の小河川の開析により形成された沖積地が南西から北東にかけて帯状に広がっており、沖積地内には、自然堤防・埋没台地のような微高地もある。

#### 周辺地形

児玉丘陵は、北東方向にのびる小支丘群で構成されている。その小支丘群間は、山地からの湧水による開析が進み、いくつもの細い谷が発達して、谷奥の湧水をためた溜池灌漑による谷田が営まれている。本遺跡もこの小支丘群のなかの一つに立地している。北西側には式内社の金鑽神社が所在する神川町二ノ宮の谷から流れる金鑽川が、同じく北西側の児玉町宮内の谷から流れる旧赤根川が東流しており、本遺跡が立地する小支丘の北西側で、金鑽川水系と赤根川水系にわかれている。本遺跡の周辺地形は非常に変化に富んでいて、立地する丘陵部を中心に、旧石器時代から各時代にわたって多くの遺跡が存在している。

### 2. 歴史的環境

本遺跡の周辺には、丘陵部を中心に各時代にわたり、数多くの遺跡が存在している。ここでは特に、弥生時代（中期）から古墳時代中期（和泉期）について周辺遺跡の様相を概観していこうと思う。

#### 弥生時代

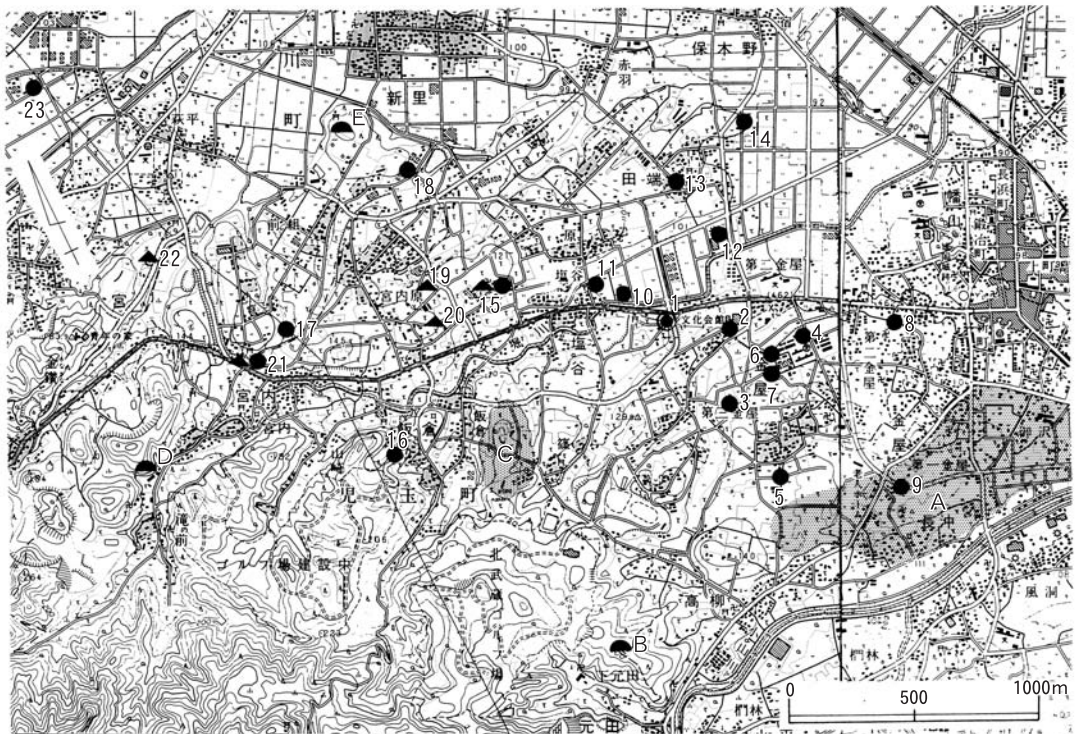
弥生時代の遺跡は、中期では前組羽根倉遺跡（柿沼他1986）で条痕文系土器を主体とする再葬墓が検出されている。後期は吉ヶ谷式土器と樽式土器をそれぞれ主体とする遺跡が丘陵部上の台地、台地の先端部に占地する特徴がみられる。吉ヶ谷式期では塩谷下大塚遺跡B地点（恋河内1990）で方形周溝墓が調査されている。さらに、神川町池田遺跡（金子1991）で住居跡が調査され、樽式では前組羽根倉遺跡・下原北遺跡及び本遺跡で住居跡が調査されている。

#### 古墳時代

古墳時代前期の遺跡は、丘陵先端部付近・丘陵部奥側に占地し、前組羽根倉遺跡・新羽根倉遺跡・羽根倉南遺跡・ミカド西遺跡（坂本・鈴木1981）・十二天遺跡（坂本・鈴木1981）・塩谷下大塚遺跡・倉林後B遺跡などがある。中期は、丘陵上に本遺跡・枇杷橋遺跡（菅谷・駒宮1973）・倉林後遺跡（利根川他1981）・金屋北原遺跡が

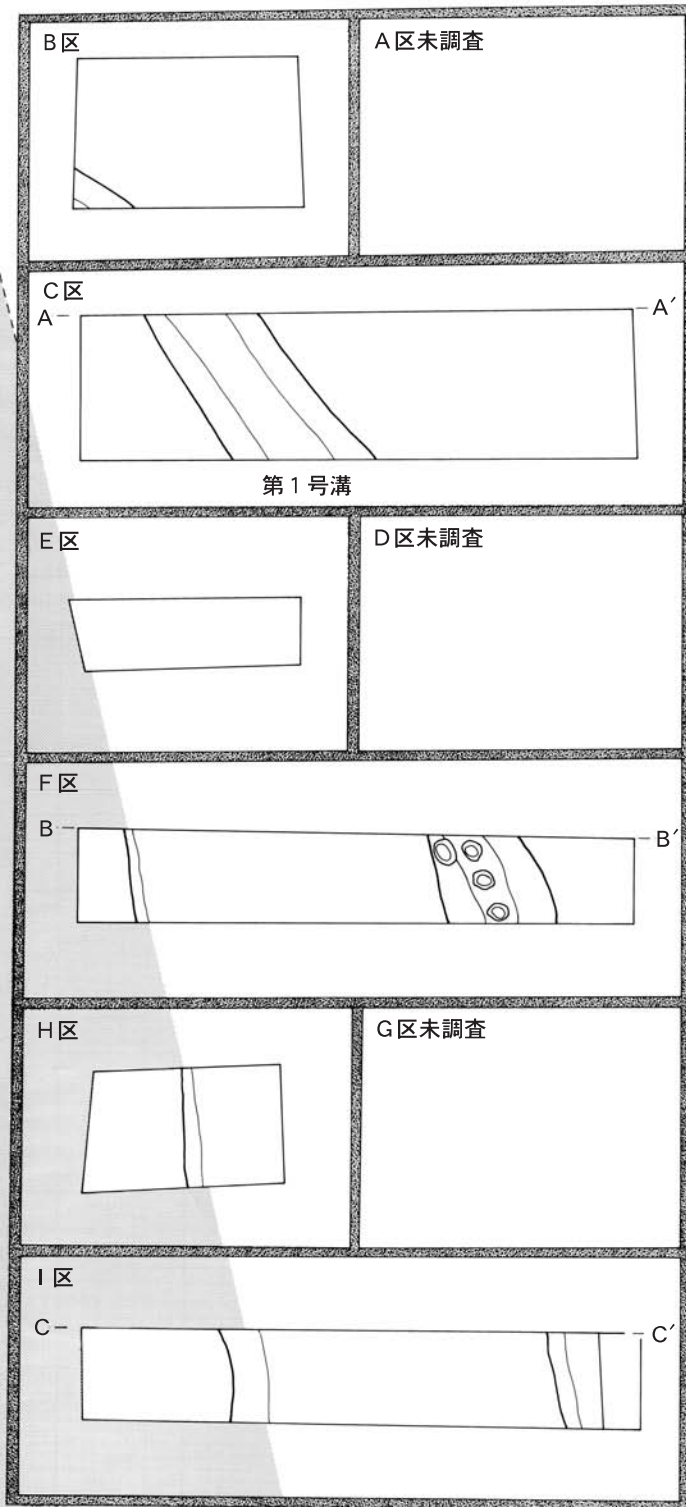
占地している。中期後半になると台地縁辺部や独立丘陵部裾部に占地する小規模集落が形成されてくる。この時期には集落以外にも在地首長層の権威を示す性格を持つことで知られている古墳が、児玉町及び周辺市町村においても数多く知られている。首長墓クラスの直径60mを測る円墳が丘陵上や独立丘上に築造されるようになる。これらの古墳群は主に小山川（旧身馴川）に沿うような形で点在し、集落域と墓域との明確な区分けがなされていると推定される。また、このような現象が出現した背景には、古墳の造成が首長層以外の階層にも広がった事などの要因が考えられる。この時期は集落遺跡が大規模から小規模なものまでが展開する時期で、集落と古墳の造営者の在地首長層との関係を考える上で重要な問題を提起している。

(松澤 浩一)



No.	遺跡名	備考・文献等	No.	遺跡名	備考・文献等	No.	遺跡名	備考・文献等
1	塩谷下大塚遺跡	本報告	11	ミカド西遺跡	坂本・鈴木 1981	21	羽根倉南遺跡	児玉町が 1994 年調査
2	枇杷橋遺跡	駒宮 1973	12	田端南空遺跡	児玉町遺跡調査会が 1994 年調査	22	池田遺跡	金子 1991
3	念仏塚遺跡	児玉町が 1986 年調査	13	田端中原遺跡	児玉町遺跡調査会が 1991 年調査	23	海老ヶ久保遺跡	金子 1997
4	金屋池脇遺跡	小澤 1969	14	十二天遺跡	坂本・鈴木 1981	A	長沖古墳群	菅谷他 1980
5	倉林前遺跡B地点	児玉町が 1994 年調査	15	真鏡寺後遺跡	志河内 1991	B	日向山古墳	児玉町が 1993 年確認調査
6	倉林後遺跡	利根川他 1981	16	神明前遺跡	児玉町遺跡調査会が 1995 年調査	C	飯倉古墳群	
7	倉林後B遺跡	児玉町が 1990 年調査	17	前編羽根倉遺跡	藤沼他 1986	D	菅戸谷遺跡	児玉町遺跡調査会が 1997 年調査
8	倉林北原遺跡	児玉町が 1988 年調査	18	新羽根倉遺跡	神川町が 1989 年調査	E	白石鏡子塚古墳	田口他 1975
9	長沖久保遺跡	志河内 1984	19	下原北遺跡	児玉町が 1984 年調査			
10	ミカド遺跡	坂本・鈴木 1981	20	下原南遺跡	児玉町が 1984～85 年調査			

第3図 周辺主要遺跡



第4図 塩谷下大塚遺跡D地点全測図



### 第三章 塩谷下大塚遺跡D地点の調査

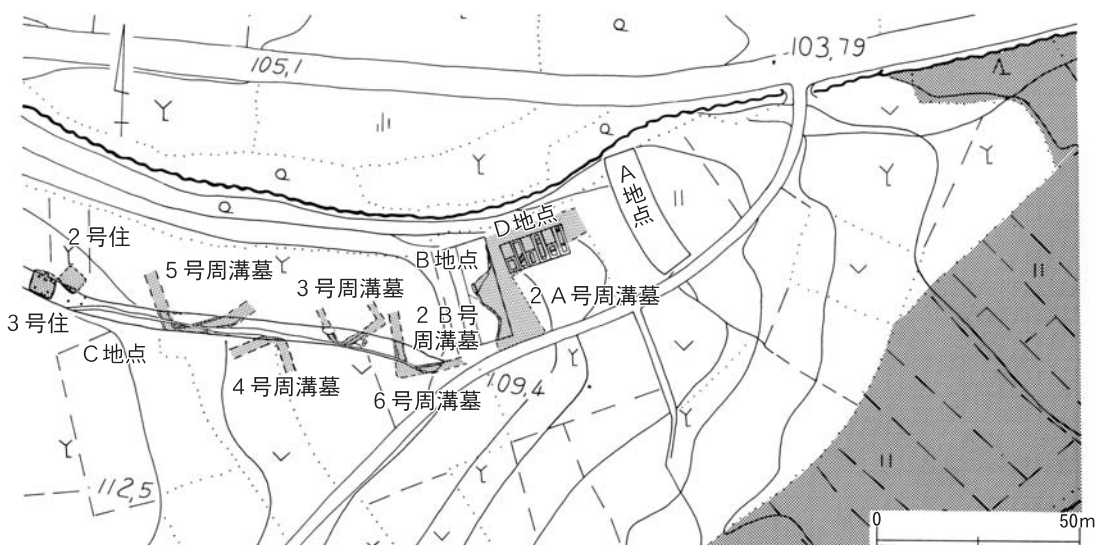
#### 遺跡の概要

本調査地点は、埼玉県遺跡地区No.54-093「塩谷下大塚」遺跡に該当している。本調査地点付近は、過去に3度の発掘調査が行われており、昭和47年に埼玉県遺跡調査会が埼玉北部用水児玉幹線水路建設にともなって「塩谷地区遺跡」として調査した地点をA地点（菅谷・駒宮1973）、昭和59年に児玉町教育委員会が個人住宅建設に伴って調査した地点をB地点（恋河内1990）、昭和63年に同教育委員会が農道改良舗装工事に伴って調査した地点をC地点とし、本報告をする地点は、D地点とする。

**立地** 遺跡の立地は、半島状に北東方向に延びた児玉丘陵の一支丘の先端部にあたり、付近を標高109.4mの等高線が走っている。また、本支丘の地形は北側が急斜面を成しているのに対して南側は緩やかであるという特徴があり、並行して湧水や小河川に依って開析された細い谷田が観られる。ほか、遺跡の北側は、東西に女堀川が流下しており、金屋条里が展開している。

**概要** 本調査地点は、昭和59年に調査を行った第2A号方形周溝墓の北側の続部に当り、周溝の一部と中世以降の溝状遺構を検出した。更に、これらの遺構からは古墳時代前期に相当する壺の胴部の破片ほか縄紋時代から中近世にかけての遺物の破片数点が出土した。

尚、主体部があると推定される部分については調査区外であるため未調査であるが、既にマウンドなども失われており視認による主体部のプラン等の確認はできなかった。  
(徳山 寿樹)



第5図 塩谷下大塚遺跡D地点周辺遺構

## 第IV章 遺構の概要

本遺跡からは、方形周溝墓の周溝の一部と、この周溝を切っている溝状遺構1条が検出された。特に方形周溝墓は、昭和59年度に児玉町教育委員会（恋河内1990）に依って調査が実施された第2A号方形周溝墓の北側の一辺である。

前回の調査では、この方形周溝墓の西側の周溝の一部が調査され、方台部側の周溝の立ち上がりは、検出できなかったものの外側の立ち上がりは検出された。さらに周溝からは、弥生時代後期から古墳時代の前・中期に渡る壺や甕また高坏や小鉢などが出土しており、出土遺物の状況などから本周溝の一部が弥生時代後期の周溝墓（第2B号方形周溝墓）の一部を破壊して構築されたことも推定されている。

しかし残念ながら本調査地点に於ては、建物の建設に伴う事前の基礎工事に依って、表土の多くは失われ、かつ周溝は建物の基礎に依って数区画に分断されていて、遺構の保存状態はあまり良好ではなかった。

### 1. 方形周溝墓

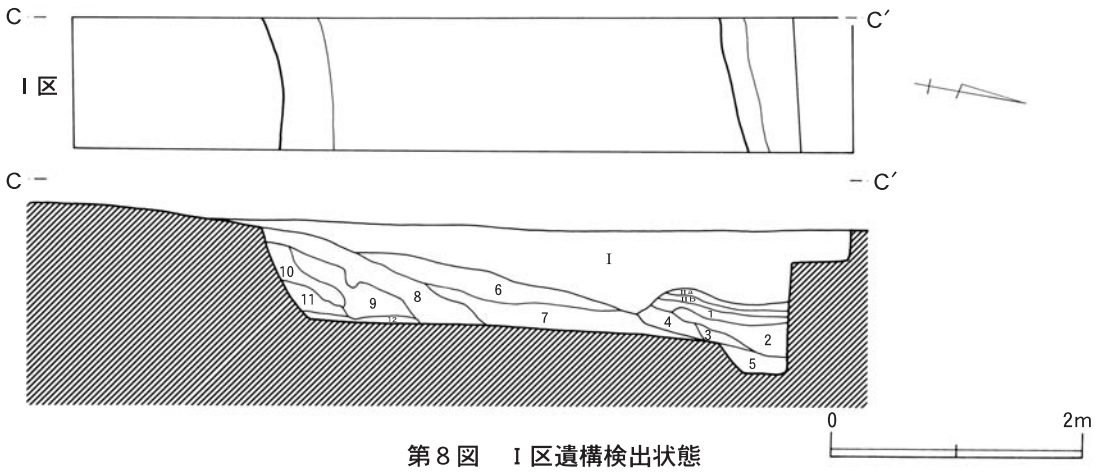
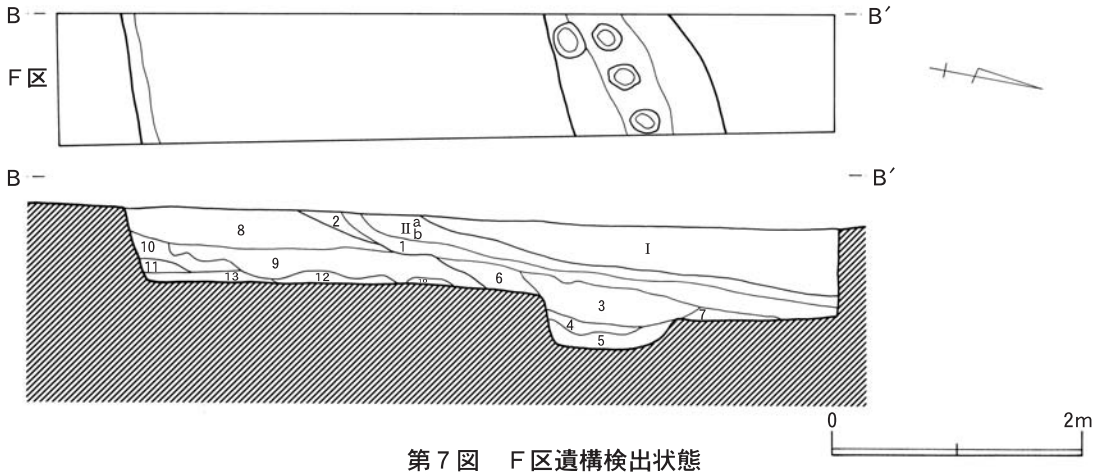
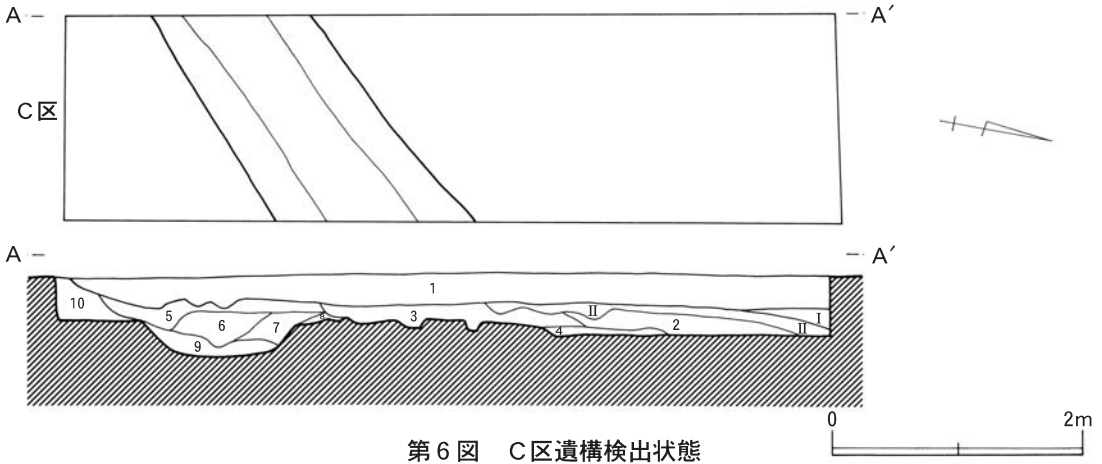
#### 第2A号方形周溝墓

周溝部の掘込みは、しっかりしておりローム層直下の灰白色粘質土まで達している。更に、周溝部の一辺は、直線であり壁の立ち上がりは、溝底面に対して約60度程度の傾斜をもつ。また溝底は、平であるが自然の傾斜と共に、北側へ緩く傾斜し、外側の立ち上がりは、検出できなかった。周溝部の一辺は、調査区内だけでも約20mほどあり、周囲の地形の状況などから推定規模では一辺が30m程にもおよび本地区の周溝墓の中でも一際大型であったことが推定できる。出土遺物は少なく、五領期にあたる東海系の壺形土器の胴部破片が周溝底よりやや浮いた状態で出土しているだけである。

### 2. その他の遺構

#### 第1号溝址

本址は、調査区内を南西から北東に対角線上に延びている。底面は、平であり、壁は緩く立ち上がる。また、遺構内の堆積土は、周溝墓の有機質土層（黒色土）とは明瞭に違う覆土であり、状態は灰色から黄褐色のやや暗い土層で全体的に砂質であり遺物は殆ど含まれていない。また、炭化粒子直径1mm位を比較的多く含んでいてまるで畠の根切り溝のような状態の覆土である。さらに上層に色調の暗い・明るい二つの浅間山系A軽石層があるが、覆土にA軽石層は全く観られない。また、すぐ南には、やや大きな塚（方形周溝墓）のマウンドがあったため、それを避ける道であった可能性もある。この第1号溝が機能を失ってから、A軽石が堆積するまでには、かなりの時間があつたと推定される。（徳山寿樹）



## 基本土層説明（各図共通）

- 第Ⅰ層 暗褐色土 しまり、粘性なし。黒土主体である。ロームブロックを含む。  
第Ⅱa層 暗灰色土 しまり、粘性なし。（As－A）を非常に多く含む。  
第Ⅱb層 明灰色土 しまり、粘性なし。（As－A）を非常に多く含む。

## 第6図土層説明

- 第1層 明褐色土 しまり粘性なし。拳大の礫を含む。（建物基礎による客土）  
第2層 明灰色土 しまり、粘性が強い。径1mm以下の炭化粒子を微量に含む。  
第3層 明灰色土 第2層に類似するが、色調がやや暗く、炭化物の量が少ない。  
第4層 暗灰色土 しまり、粘性有する。基盤である。白色粘土粒を若干含む。  
第5層 明灰色土 しまり、粘性有する。3層に似るが色調が明るく砂質である。  
第6層 暗灰色土 しまり、粘性共に有する。第5層を斑状に含む。  
第7層 暗灰色土 強くしまっており、粘性もある。6層より色調がやや明るい。  
第8層 暗灰色土 第7層に類似するがさらにしまっている。  
第9層 暗灰色土 鉄分・炭化粒子を多く含み、非常によくしまっている。  
第10層 明灰色土 粘性、しまり有する。ロームブロック・ローム粒子を含む。

## 第7図土層説明

- 第1層 明灰色土 しまり、粘性共に有する。鉄分を比較的多く含み砂質である。  
第2層 暗灰色土 しまり、粘性有する。7層主体であるが、1層を斑状に含む。  
第3層 明灰色土 しまり、粘性有り。5層に似るが色調が明るく砂質である。  
第4層 暗灰色土 しまり、粘性有する。3層を斑状に含む。（前記8層である）  
第5層 暗灰色土 鉄分・炭化粒子を多く含み、非常によくしまっている。  
第6層 明灰色土 しまり、粘性共に有する。第4層を斑状に含む。  
第7層 明灰色土 よくしまっており粘性も強い。1mm以下の炭化粒子を含む。  
第8層 黒色土 しまり、粘性有する。黒色土主体であり、明褐色土を含む。  
第9層 黒色土 第8層に類似するが、明褐色土が少ない。（I区7層と同じ）  
第10層 暗黄色土 有機質の黒色土にローム風化土が非常に多く混入している。  
第11層 黒色土 しまり、粘性共に有する。黒色土主体の層である。  
第12層 黒色土 しまり、粘性共に強い。粘土ブロックを多く含む。  
第13層 明黄色土 しまり、粘性が非常に強い。ローム・粘土の風化土である。

## 第8図土層説明

- 第1層 明灰色土 しまり、粘性有する。5層に似るが色調が明るく砂質である。  
第2層 暗灰色土 しまり、粘性有する。1層を斑状に含む。（C区8層である）  
第3層 暗灰色土 強くしまっており粘性もある。第2層より色調がやや明るい。  
第4層 暗灰色土 粘性、しまり共に有する。第1層を斑状に含む。  
第5層 暗灰色土 鉄分・炭化粒子を多く含み、非常によくしまっている。  
第6層 黒色土 しまり、粘性有する。黒色土主体であり、明褐色土を含む。  
第7層 黒色土 第6層に類似するが、明褐色土が少ない。  
第8層 暗黄色土 有機質の黒色土にローム風化土が非常に多く混入している。  
第9層 黒色土 しまり、粘性共に有する。黒色土主体の層である。  
第10層 暗黄色土 しまりがあり、粘性は比較的強い。ローム微粒子を多く含む。  
第11層 暗黄色土 10層に似るが、ロームブロック（径1～3cm）を多く含む。  
第12層 明黄色土 しまり、粘性が強い。ローム・粘土の風化土である。



## 第V章 第2 A号方形周溝墓の出土遺物

### 1. パレス文様壺 (第9図)

第2 A号方形周溝墓の北側周溝の覆土中からは、東海西部の伊勢湾地方に系譜をもつパレス文様を施した壺の破片が出土している。破片は、全部で7片あるが、すべて同一個体と思われる胴部中位の破片である。破片からの器形の推定では、胴部が下ぶくれの器形で、胴部下半の最大径が約31cm程度の比較的大形の壺と思われる (第9図)。このパレス文様壺 (注1) は、その胎土から見て、本抛地の伊勢湾地方からの搬入品ではなく、当地域周辺の在地で製作されたものと考えられるが、その製作には在郷土器の伝統的な手法や工程と若干相違した部分も見られる。ここでは本土器の製作工程のうち、生地 (粘土) 作り、成形、整形、調整、文様施文、塗彩の6工程について観察結果を述べ、次に本土器の編年的位置について考えてみたい。

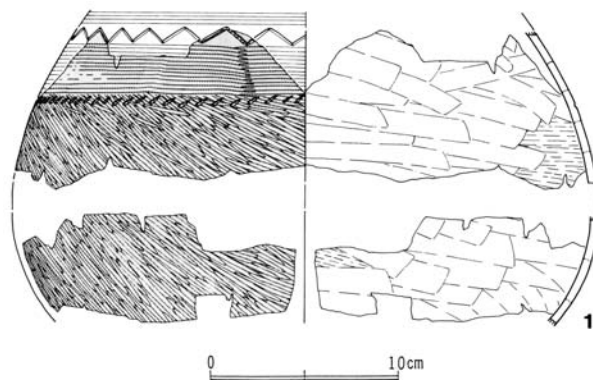
#### a. パレス文様壺の製作工程

生地の粘土は、混和材の砂や小石が非常に少ない精選された緻密な粘土で、非常に粒径の小さな赤色粒や白色粒を含んでいる。このような胎土は、当地域の壺・高坏・器台・小形丸底壺など、ミガキを多用する器種の中に時折見られるものであり、パレススタイル壺特有のものとは言えないであろうが、一般的な土器の胎土に比べると、非常に木目の細かな粘土である。

成形は、粘土紐の積み上げであるが、破片のため輪積みか巻き上げかは不明である。器肉は、厚さ4 mmで比較的薄く均一に仕上げられている。整形段階に粘土の掻き取りやケズリなどの器肉を薄くする技法の痕跡が見られず、また内外面に丁寧な調整が施されているにもかかわらず、粘土紐の積み上げ痕の部分で比較的割れやすいことからすると、本土器は粘土紐を幅2 cm前後の帯状に薄く延ばした形態にして積み上げるなど、この成形段階ですでに器肉の厚さをある程度薄くしていた可能性も考えられよう。

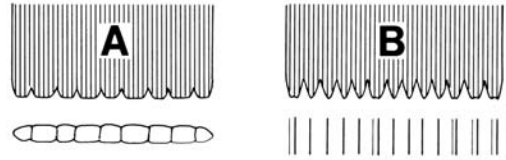
整形は、内面は木口状工具による横方向のナデである。外面は、ミガキ調整が丁寧に施されているため、整形手法の痕跡が明確には見られないが、ミガキの方向とは異った等間隔の条線と思われる痕跡が見られる部分もあり、おそらくハケ整形であったものと思われる。

調整は、外面は胴部文様帯下も含めて、全面非常に丁寧な斜方向のミガキを施しているが、当地方の在郷土器に見られる伝統的なミガキとはやや趣が異なり、幅が狭く長さも短い比較的小さいミガキである (注2)。内面は、条線の見られないやや幅の狭い篋状工具による篋ナデで、比較的強くナデ付けているが、部分的に下地の整形痕を残している。なお、胴部



第9図 第2 A号方形周溝墓出土のパレス文様壺

文様は、伝統的な在出土器ではミガキ調整の前に施文されるのが一般的であるが、本土器では胴部全面にこのミガキ調整が施された後に施文されており、その施文段階の順序が一般の土器とは異なっている。



第10図 施文具形態模式図

文様は、破片のため胴部文様の一部しか解らないが、山形文と櫛描横線文と刺突文によって構成される、パレススタイル壺の盛行期に見られる典型的なパレス文様である。施文順序は、櫛描横線文を施した後に、横線文とあまり重複しないように、山形文と刺突文を丁寧に施文しているようである。山形文は、長さ1.5cmの木口状工具（第10図A）の木口面全体を使った刺突の連続によるもので、方向は右回りに順次施文している。工具の木口面は、櫛歯と異なって凹凸の差が小さく、凸部の先端が広く丸みをもつもので、木口面全体を深く差し込んでいるため、外見は沈線と同じような雰囲気呈している。山形文の一単位は比較的小さく、高さは約1cmで、谷部の距離は2.3cm程度である。櫛描横線文は、長さ3cmで13本歯の櫛歯状工具（第10図B）を使用している。個々の沈線は、いずれも非常に浅く幅の狭いもので、櫛歯の歯先が鋭く尖った工具のようであるが、中には歯先の先端が若干つぶれて窪み、非常に狭い2本の沈線に見えるような部分もある。沈線の間隔は、比較的広く整っており、沈線間の部分に施文具本体の擦痕は見られない。施文方向は、山形文と同じく右回りである。横線文の重複は見られず、器面を一周するだけの施文と思われるが、図化した破片の右端には、工具を土器の器面から一度離して継ぎ足した継点か1箇所あり、工具を器面から離さずに施文の進行を止めた静止点が、破片中央部と左端の2箇所に見られる。その間隔は、横線文の最下端の沈線で6cmと7.5cmを測り、ほぼ近似した間隔をとっている。櫛描横線文下の刺突文は、山形文と同一の木口状工具（第10図A）を使用し、土器の器面に対して工具の木口面を斜めに刺突することで、刺突文の長さを調節しているようである。

塗彩は、胴部文様帯の部分も含めた胴部外面の全面に赤彩が施されており、山形文の中はもちろんのこと文様帯下端の刺突文の中にまで赤彩が見られる。パレス壺の赤彩手法は、胴部文様をもたないものには全面赤彩を施す例も見られるが、胴部文様をもつものでは胴部文様帯下端の刺突文より下の胴部下半と、胴部文様帯内では山形文と貼付凸帯文に施されるのが一般的であり、本土器のように胴部文様帯をも含めた胴部全面の赤彩はあまり例がないようである（注3）。

以上のように、本土器に見られる胴部文様の文様構成やその施文手法は、パレススタイル壺の規格性をもつ文様と技法的にもほぼ同一である。しかしながら、土器の製作工程の面では、器表面を非常に丁寧に細かくミガキ調整していることや、そのミガキ調整後に文様を施文していること、及び胴部文様帯を含めた胴部全面を赤彩していることなど、一般的なパレススタイル壺とは異質な点も多く認められる。このことから、本土器を安易にパレススタイル壺の系統（赤塚1995）とすることはできず、むしろ丁寧なミガキ調整を施し、胴部全面を赤彩していることからすると、二重口縁系などの異系統の壺が、パレススタイル壺のパレス文様を採用した土器である可能性が高いのではないと思われる。

## b. 編年的位置

第2 A号方形周溝墓から出土したパレス文様壺は、壺の系統は不明であるが、胴部の文様構成は浅井和宏氏のE類（浅井1986）に該当すると考えられるものである。時期については、山形文の施文手法が工具木口面の刺突による手法で、山形文はピッチが小さく、高さがやや低い形態であり、当地域のパレス壺E類の系列の中では、比較的古い段階の文様施文の特徴が認められる。おそらく、関東地方におけるパレス壺に関連する資料を集成して分析された田口一郎氏のI類（田口1987）の時期に該当するものと思われ、その編年的位置は、本拠地の伊勢湾地方における赤塚次郎氏の廻間Ⅱ式の前半頃（赤塚1990・1997）に概ね対比されるものと考えられる。

本遺跡が所在する児玉地方は、関東地方の中でもパレススタイル壺に関連する資料が多い地域として知られており（田口1987）、特に志戸川流域に位置する美里町南志渡川遺跡の前方後方形を含む周溝墓群から出土した土器群（美里町1986）は、その代表例として著名である（注4）。志戸川流域とは現在の小山川（旧身馴川）を挟んで北西側に隣接する女堀川流域（旧赤根川・女堀川水系）でも、本遺跡の他に児玉町後張遺跡（注5）、川越田遺跡（富田・赤熊1985）、生野山遺跡（山川1984）、日延遺跡（恋河内1999）や、本庄市諏訪遺跡（柿沼・小久保1979）などで、パレススタイル壺やそれに関係する土器が出土している。上流域の児玉丘陵先端部に立地する本遺跡以外は、いずれも中流域の低地部内の自然堤防上や微高地上に立地する集落や、低地部周辺の残丘上や台地上に立地する方形周溝墓を主体とする墓域の遺跡である。中流域に位置するこれらの遺跡から出土した土器よりも、上流域に位置する本遺跡例の方が古いようであり、現在までの資料では、女堀川流域で最も古いパレススタイル壺関連の土器である。その時期は、志戸川流域の南志渡川遺跡の前方後方形の第4号周溝墓とほぼ同時期と推測され、当地方の古墳時代前期における外来系土器の展開の様相を知るうえで重要な資料と言えよう。（恋河内昭彦）

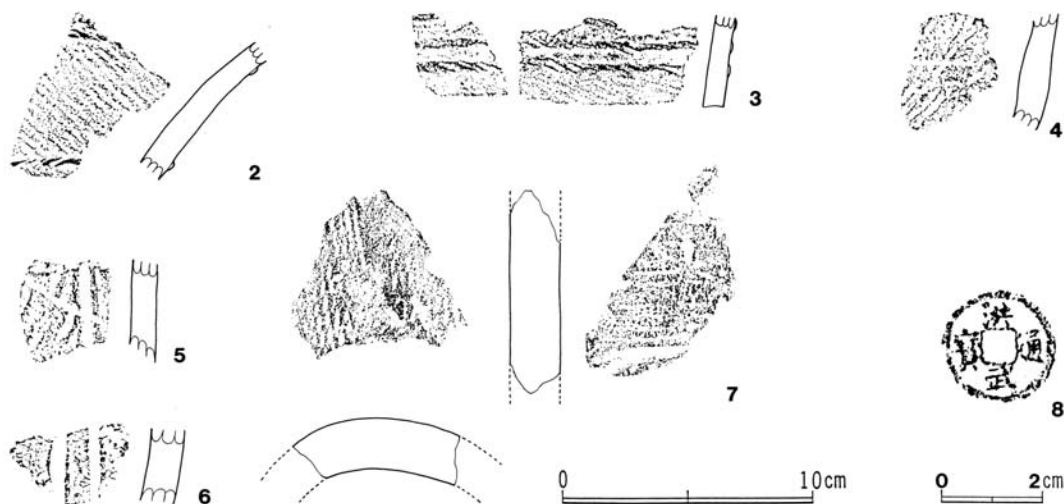
### 注

- (1) 本土器は、胴部の破片資料であるため、器形の全容については不明である。そのため、壺の系統についてもパレススタイル壺の系統（赤塚1995）か明確ではなく、また後述するように、それとは異系統の壺の可能性もあることから、ここでは単にパレス文様を施した壺という意味で、「パレス文様壺」と呼称する。
- (2) このような伝統的な幅広のミガキとは異なった細いミガキは、偶然的な場合もあろうが、日延遺跡B地点（恋河内1999）の第8 B号住居跡で出土した畿内系・北陸系・伊勢湾系の外来系土器のミガキに多く見られることは注目され、あるいはそれらの西方地域のミガキ手法の影響である可能性も考えられよう。
- (3) 管見に触れたものでは、埼玉県深谷市東川端遺跡第2号方形周溝墓出土土器（中村・瀧瀬1990）や千葉県舟尾町田遺跡出土土器（田口1987）などがある。
- (4) 志戸川流域では、この他に北貝戸遺跡第7号住居跡（山川1984）でも、パレススタイル壺の口縁部形態を模倣したような壺の口縁部破片が出土している（田口1987）。
- (5) 1985年に後張第二次遺跡調査会が調査したC地点の第195号住居跡より、完形のパレススタイル壺が1個体出土している。

## 2. その他の遺物 (第11図)

第9図 No 1 のパレス文様壺の破片以外に、第2 A号方形周溝墓の周溝覆土中からは、極少量ではあるが縄文時代と中世の遺物が混入して出土している (第11図)。No 2～No 4は、縄文時代前期の諸磯b式の深鉢形土器の破片である。No 2は、地文に単節縄文 (R L) を横位に施文後、粘土紐による浮線文を貼り付け、その上に斜行するキザミを施している。No 3は、地文と粘土紐貼り付けによる浮線文上に、無節縄文 (R) を施している。No 4は、地文に無節縄文 (L) を施している。No 5とNo 6は、縄文時代中期後半の加曾利E II～III式の深鉢形土器の小破片である。胴部に縦方向の太い沈線による無文部と施文部の区画をもち、施文部にはNo 5が単節縄文 (R L)、No 6が単節縄文 (L R) を縦方向に施文している。また、No 6は無文部内にやや蛇行ぎみに垂下すると思われる太い沈線を加えている。

No 7は、丸瓦の破片である。長さは9.0cm、幅は6.6cmほど残存しており、厚さは約2cmである。凸面は比較的粗い縄目による叩きの後にナデを加えている。凹面は横方向の籠ナデであるが、部分的に下地の布目圧痕を残している。また凹面側の破片下端部には紐の圧痕が見られる。焼成は環元焰焼成で、胎土には白色粒を含み、色調は凹凸両面とも淡灰色である。この丸瓦は、本遺跡の西側約900mに位置する真鏡寺館跡 (恋河内1991) や、北東側約4.3kmに位置する城の内遺跡 (恋河内1997) とその北側に近接する日延遺跡 (恋河内1999) など出土した中世瓦の中に類似したタイプのもが見られる。その特徴から恐らく中世前期の12世紀末～13世紀頃のものと考えられる。No 8は、古銭の「洪武通寶」(初鑄1367年)である。直径は2.2cm～2.3cmあり、裏面は無文である。表裏面とも錆が侵行して荒れており、緑青が顕著である。 (恋河内昭彦)



第11図 その他の遺物



## 第VI章 児玉丘陵における集落域と墓域

### ―塩谷下大塚遺跡とその周辺―

#### はじめに

土地の利用形態は、生態的環境を前提とするとはいえ、土地利用には前代からの一定の継承関係をもっているように見える。ここでは、遺跡のもつ占地と遺構の表示性に注目し、本遺跡をはじめとする児玉丘陵を中心とした土地利用形態の一端について検討することで、今後の調査・検討のための覚書としたい。

#### 1. 方形周溝墓と集落域

塩谷下大塚遺跡は、すでに三次の調査が実施されており、塩谷遺跡（駒宮他、1973）として報告された地点（A地点）と、下大塚遺跡の既報告のB地点（恋河内、1990）において方形周溝墓が確認されており、その中間に位置する本地点においても方形周溝墓が確認されている [第5図]。なお、C地点においては、方形周溝墓の他に集落跡の一部が確認されており、本遺跡から南西方向の丘陵上には平氏の宮遺跡へと連なる集落域が展開していることを推定することができる [第12図]。

#### 集落域と墓域

このような丘陵上における塩谷下大塚遺跡に見られるような集落域と墓域の布置関係は、隣接する児玉丘陵上においても確認することが可能であり、ひとつの傾向として捉えることが可能であろう。たとえば、本遺跡と支谷を挟んだ対岸の丘陵上においても、弥生後期～古墳前期等の土器片の散布認められ試掘調査によって集落が確認されている下別所遺跡があり、この丘陵先端近くに枇杷橋遺跡（駒宮他、1973）が位置し、またやや丘陵内に入った地点にも方形周溝墓の群在が確認されている。さらに、隣の丘陵部においても古墳時代前期の住居が検出されている念仏塚遺跡（未報告）の丘陵先端部には金屋池脇遺跡（小沢、1969）が位置している。このように、本遺跡に隣接する丘陵上に弥生時代終末期から古墳時代前期の集落域が確認されており、その丘陵の先端部のそれぞれにおいて方形周溝墓が確認されている [第12図]。

このように古墳時代前期の集落の占地する丘陵先端部付近に方形周溝墓が営まれる傾向を読みとることが可能であるならば、古墳時代前期の集落が確認されている田端中原遺跡（徳山、1992）の丘陵に続く台地上に位置する十二天遺跡（坂本他、1981）検出された土壇状の遺構についても、方形周溝墓に関わる遺構であることが可能かも知れない。ともあれ、このように本遺跡周辺の方形周溝墓は、集落が形成される丘陵ないしは丘陵に続く台地の先端部のそれぞれに対応するように確認されていることに注目すべきである。



第12図 塩谷下大塚遺跡周辺の古墳時代主要遺跡

1. 塩谷下大塚遺跡 2. 下大塚・平氏の宮遺跡 3. 枇杷橋遺跡 4. 下別所遺跡 5. 金屋池脇遺跡  
 6. 念仏塚遺跡 7. 十二天遺跡 8. 田端中原遺跡 9. 田端南堂遺跡 10. ミカド西遺跡  
 A. 長沖古墳群 B. 飯倉古墳群 C. 日向山古墳群

## 2. 古墳前期集落の継続性

本遺跡のような児玉丘陵区域の谷戸を臨む丘陵上には、真鏡寺後遺跡（恋河内他、1991）をはじめ前組羽根倉遺跡（柿沼他、1986）、あるいは本遺跡に近接する平氏の宮遺跡等の弥生時代後期の集落が認められる。これらの集落は、開析谷地形を臨む占地であり該期の水田もこの谷を利用していった可能性が高いと見てよいであろう。古墳時代前期においても、このような弥生後期の集落と基本的には同様な占地をとり、先の前組羽根倉遺跡のように継続的に営まれる集落や平氏の宮遺跡周辺のように弥生時代後期の集落に接して塩谷下大塚遺跡（恋河内、1990）のような古墳時代前期以降の集落が営まれている。おそらくこのような占地は、弥生後期に拓かれた水田をはじめとする耕地が継承され、その周辺に継続的に集落が営まれている姿であると考えられることができる。また、これらの丘陵に臨む山地域と接する地点においても、古墳時代前期の集落跡である飯倉神明前遺跡（未報告）が確認されている。

### 区域内の単位性

しかし、この区域においても古墳時代前期においては、一方で赤根川の自然堤防上に位置するミカド西遺跡（坂本他、1981）や田端南堂遺跡（未報告）のような低地域においても集落が認められる点にも注目しておくべきであろう。なお、これらの遺跡については、これに対応する方形周溝墓群は現在までのところ確認されていないが、伝統的な区域への造墓が想定できるかも知れない。ともあれ、このような丘陵部における集落と耕地、あるいは方形周溝墓の一定区域内での対応関係を認め得るような状況は、それぞれの集落と耕地・墓域あるいはその他の用益地がひとつの単位性を帯びており、一定の小区域内でそれぞれ自己完結的な単位的なまとまりをもっていたことを示唆している。

### 低地域の集落

児玉町周辺の平野部の低地域においては、後張遺跡群のような大規模な集落の設営と新規の開田が、埋没河川の再掘削等によって果たされていると推定されていることにも注意しておかなくてはならないが、基本的には水田耕地と集落の対応を想定することができる。このような低地部の新開の水田からみると、谷水田は伝統的な耕地として捉えることのできるものである。ともあれ、後張遺跡群等の低地域の大規模集落にかかる方形周溝墓群が集落に隣接して確認されていないことも、丘陵部の占地傾向とは異なった方形周溝墓群が存在していることも想定しておかなくてはならないであろう。この点については、この地域最古の前方後方墳である鷺山古墳（坂本他、1986）の存在とともに今後の課題としておかなくてはならない点である。

## 3. 遺跡の表示性と土地利用の継承性

方形周溝墓は、低墳丘ではあっても古墳時代後期において未だ墳丘のもつ墳墓としての表示性が失われていないことは、古墳群内に周溝墓群が位置してい



る塚本山古墳群（小久保他、1977）や美里町羽黒山古墳群（長滝、1991）等の例からも明らかである。つまり、これらの方形周溝墓群は、古墳時代後期においても墓域として認知されるべき墳丘が残存していたことの証左であり、このような遺跡の存在にも注目しておくべきであろう。

#### 墳丘と儀礼単位

このように方形周溝墓は、低墳丘であるとはいえ一定の墳墓としての表示機能をもっている。しかし、方形周溝墓では、後期古墳がしばしば時期の離れた平安時代をはじめとする遺物が検出されるのに対して、相対的に長期の儀礼的な継続性が乏しい傾向を認めることができる。このような墳墓の埋葬や墓前祭祀等が、被葬者と儀礼執行集団内外との関係の確認行為であるという側面に注目するならば、この間には、一定の社会的関係に変化ないしは不連続を想起すべきであろう。

古墳時代後期においては、塩谷下大塚遺跡等の丘陵部とともにミカド遺跡（坂本、1981）に見られるような低地内微高地への進出が顕著である。しかし、枇杷橋遺跡（駒宮他、1973）や倉林後遺跡（利根川、1981）あるいは真鏡寺後遺跡（恋河内、1991他）等の丘陵部にも小規模な集落の点在が認められる。

これらの集落遺跡は、長沖古墳群あるいは飯倉古墳群の近傍に位置しているところから相互の関係を想起させるものである。しかし、該期においては古墳時代前期のような集落と墓域とが近接して位置するような直接の対応関係が認められなくなり、集落と墓域という関係がこの間に再編成されていると考えることができる。古墳群は墓域がより広域に複数の集落にかかる単位として相互の関係が統一的に捉え返され、旧来の共同用益地の一部を分割し墓域として設置されているものである。もちろん、このような古墳群の形成は、一定の土地への造墓の継続とその累積が前提であり、それぞれの古墳への埋葬行為は、集落という地縁的な原理とは異なった血縁的な原理に基づいて行われるのであろうが、おそらくは集落群の内部に複数の出自集団が包摂されているのであろう。

#### 小古墳群

古墳時代後期においては、この長沖古墳群のような大規模な古墳群のほか、高柳地内の低位の山地内に2基（ないしは3基）によって構成される日向山古墳群が確認されており、小規模な終末期の古墳群であると推定されるものである（未報告）。この古墳群は、長沖古墳群とは一定の距離を隔て、占地も異にしていることに注目しておくべきである。長沖古墳群のような規模の大きな古墳群と離れて後期古墳が築造されていることについては、近年の発掘調査によって明らかになってきたところであり、東小平中山遺跡（未報告）で確認された古墳や、脊戸谷遺跡（未報告）で確認された2基で構成される「宮内古墳群」もやはり丘陵部を臨む低位の山地内に位置している。これらの古墳はいずれも低墳丘で埴輪をもたず、その主体部は終末的な模様積みの胴張り横穴式石室である。また、元田古墳群とされたものも、おそらくはこのような終末期の小規

模な古墳群と考えることができるものであろう。このような“小古墳群”は、従来の古墳群の占地域より更に生活域から離れた位置にあり、その造営の開始が遅く、1基ないしは2～3基程の少数の古墳によって構成されているという共通性をもっている。

これらの“小古墳群”は、おそらく特定の出自集団にかかる墓域として成立したものであろう。ちなみに、東小平中山遺跡で検出された古墳と隣接して確認された古代寺院が相互に関連を持っているならば、この時期に形成された新興の有力階層が新たに墓域を構成したとするよりも、むしろ伝統的な有力な階層が従来の墓域を離れ、何らかの異なった意義を持った古墳として造営されたことも積極的に検討して行く必要があるものと思われる。

## まとめ

この地域の方形周溝墓が長期の儀礼的行為が認められないのに対し、古墳群においては、造墓が停止した以降においても、墓前における何らかの儀礼的な行為が行われているようであり、しばしば平安時代の遺物が確認され、一定の儀礼上の継承関係を想定することができる。このことについては、かつて古墳の出土遺物を検討し触れたことがある（鈴木、1985）。ともあれ、墳墓の築造行為は、墳丘という恒久的な表示物の構築の過程を伴っている。このような墳丘のもつ墳墓としての表示性が儀礼の反復と継承性のひとつの前提である。古墳は、墳墓に関わる直接の行為が付帯する時期以降、これが行われなくなった時期においてもその墳墓としての表示性が残存することが特徴である。したがって、当事者以外にも墳墓としての観念形態が伝達され再構成しうる土地である。このことが、平安時代において古墳祭祀が復活するひとつの前提となったと考えてよい。

### 表示媒体と伝承

しかしながら、もとより墳墓をはじめとする表示媒体が表示機能を持ち得るのは、実はそれ自身での自律的な表示性を意味するものではない。社会的な共同意識がそれを“表示するもの”として認知するわけである。したがって、土地への働きかけが“表示するもの”として意識されるのは、表示媒体とそれに伴う言説・伝承による社会的な関係に依存しているわけである。言い換えると“表示するもの”としての土地の改変の形態によって、伝承や言説が喚起され継承伝達される側面をもっている。したがって、このような“表示するもの”としての遺跡の分析によって社会的な関係に接近し得る糸口を見出し得るであろう。

（鈴木徳雄）

## 引用・参考文献

- 赤塚次郎 (1990) 「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集
- 赤塚次郎 (1990) 「東海系のトレース」『古代文化』第44巻第6号
- 赤塚次郎 (1995) 「壺を加飾する」『考古学フォーラム』7
- 赤塚次郎 (1997) 「廻間Ⅰ・Ⅱ式再論」『西上免遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第73集
- 赤塚次郎 (1999) 「三世紀への加重」『考古学フォーラム』11
- 浅井和宏 (1986) 「〈宮廷式土器〉について」『欠山式土器とその前後』愛知考古談話会
- 小沢国平 (1969) 「児玉町金屋池脇遺跡」『埼玉考古』第7号
- 柿沼幹夫・小久保徹 (1979) 『下田・諏訪』埼玉県遺跡発掘調査報告書第21集
- 恋河内昭彦 (1990) 『下大塚遺跡』児玉町文化財調査報告書第11集
- 恋河内昭彦 (1991) 『真鏡寺後遺跡Ⅲ』児玉町文化財調査報告書第14集
- 恋河内昭彦 (1997) 『城の内・日延・東田・浅見境北遺跡』児玉町文化財調査報告書第23集
- 恋河内昭彦 (1999) 『日延Ⅱ・児玉条里遺跡』児玉町文化財調査報告書第31集
- 小久保徹他 (1977) 『塚本山古墳群』埼玉県遺跡発掘調査報告書第10集
- 駒宮史朗他 (1973) 『枇杷橋遺跡』埼玉県遺跡調査会発掘調査報告書第20集
- 坂本和俊他 (1981) 『金屋遺跡群』児玉町文化財調査報告書第2集
- 坂本和俊他 (1986) 『埼玉県古式古墳調査報告書』埼玉県史編さん室
- 菅谷浩之他 (1980) 『長沖古墳群』児玉町文化財調査報告書第1集
- 鈴木徳雄 (1985) 「古代児玉郡における山野の問題」『橋ノ入遺跡Ⅰ』児玉町文化財調査報告書第5集
- 田口一郎 (1987) 「パレス・スタイル壺の末裔たち」『欠山式土器とその前後』愛知考古談話会
- 徳山寿樹 (1992) 「児玉町田端中原遺跡の調査」『第25回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会ほか
- 富田和夫・赤熊浩一 (1981) 『立野南・八幡大神南・熊野大神南・今井遺跡群・一丁田・川越田・梅沢』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第46集
- 利根川章彦 (1981) 『倉林後遺跡』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第3集
- 中村倉司・瀧瀬芳之 (1990) 『東川端遺跡』埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団報告書第94集
- 長滝歳康 (1991) 『白石古墳群・羽黒山古墳群』美里町教育委員会
- 山川守男 (1984) 「北武蔵児玉地域の古墳時代前期の様相」『第5回 三県シンポジウムー古墳出現期の地域性ー』北武蔵古代文化研究会ほか
- 山川守男・福田聖・石坂俊郎 (1998) 「北武蔵における土器群の画期と交流」『庄内式土器研究』XVII 庄内式土器研究会
- 美里町 (1986) 『美里町史』通史編

# 版 图







1. 塩谷下大塚遺跡より金屋条里を臨む



2. D地点よりC地点を臨む

図版 2



1. C区第1号溝東側より



2. C区第1号溝北側より



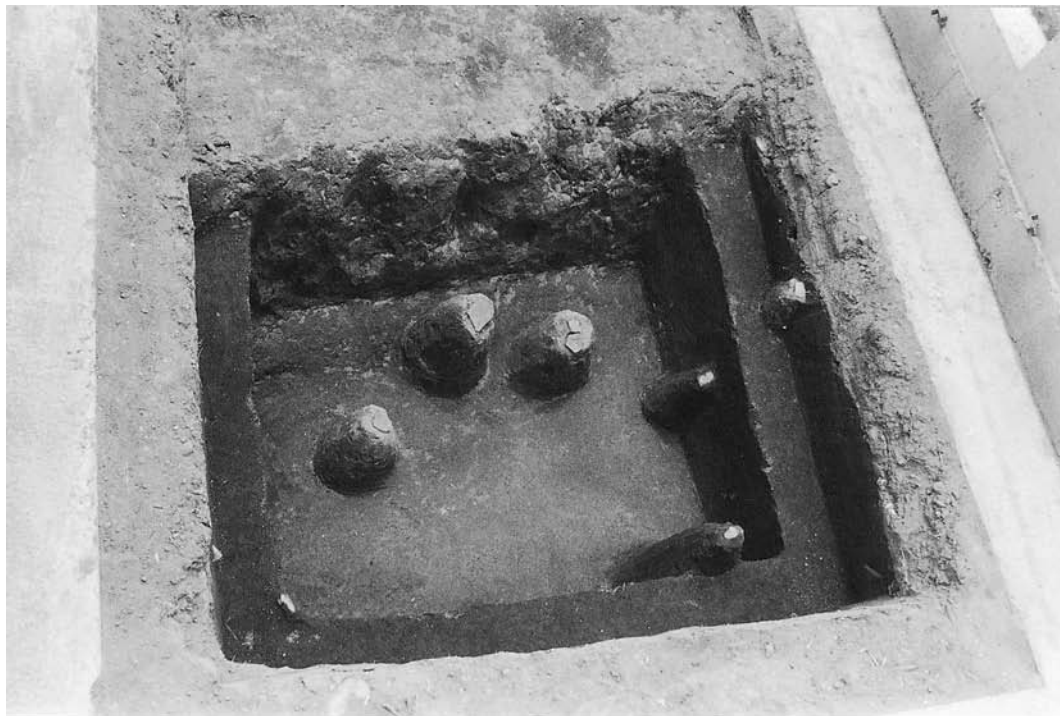


1. I区北側より



2. I区南側より

図版 4



1. H区北側より



2. F区北側より





1. 調査区近景



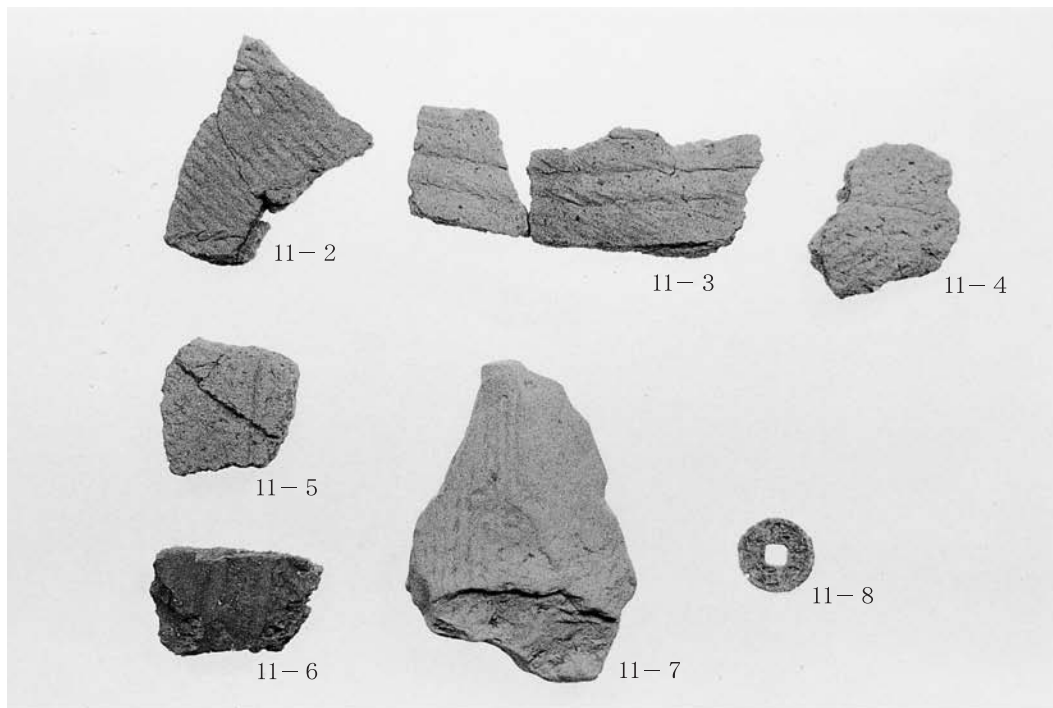
2. 調査区全景



1. 第2A号方形周溝墓出土のパレス文様壺



2. パレス文様壺拡大



1. その他の遺物



2. 洪武通寶拡大

## 報告書抄録

フリガナ	シオヤシモオオツカイセキ							
書名	塩谷下大塚遺跡							
副書名	D地点の調査					巻次		
シリーズ	児玉町遺跡調査会報告書					巻次	第10集	
編著者	徳山寿樹・恋河内昭彦・鈴木徳雄・松澤浩一							
編集機関	児玉町遺跡調査会							
所在地	〒367-0298 埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368 TEL0495 (72) 1331							
発行日	2000 (平成12) 年6月30日							
フリガナ 所収遺跡	フリガナ 所在地	コード		北緯 (° ' ")	東経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡					
シオヤシモオオツカイセキ 塩谷下大塚 遺跡 チテン (D地点)	コダマグンコダママチ 児玉郡児玉町 オオアザシオヤアザシモ 大字塩谷字下 オオツカイ 大塚	113824	093	36° 11' 10"	139° 06' 55"	19910513 ? 19910531	146	共同住宅 建設
所収遺跡	種別	主な年代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
塩谷下大塚 遺跡 (D地点)	墓	古墳時代 前期	方形周溝墓		土器・瓦片 等		パレス 文様壺が 出土した	



児玉町遺跡調査会報告書第10集

塩谷下大塚遺跡

－D地点の調査－

平成12年6月30日印刷

平成12年6月30日発行

発行者 児玉町遺跡調査会  
埼玉県児玉郡児玉町大字八幡山368

印刷所 たつみ印刷株式会社  
埼玉県深谷市東大沼356番地

